

〈書評〉

御子柴善之著

## 『カント哲学の核心——『プロレゴメナ』から読み解く』

(NHK ブックス、2018年)

宇佐美 公生

難解な古典の解説には様々な形態が考えられる。原典にできるだけ寄り添って逐字的に読解してゆく形から、解説者の独自の読み込みで原典の論旨を換骨奪胎し、その心髄をなるべく分かりやすく解説しようとするものまで、そのありようは様々なのであるし、解説書を手にする読者の目的に応じて、その有用性も異なってくる。カントの著作への解説でも、読者層の違いに応じ様々なレベルの解説書がこれまで出版され翻訳されてきた。その数はおそらく哲学書の解説の中でも筆頭の部類に属すのではないと思われる。

そのような中、ここに取り上げる御子柴氏の著書には、「今度こそ『純粋理性批判』が分かる！」という帯の文句がつけられている。この言葉が象徴するように本書は、カント哲学の中核たる『純粋理性批判』の「問い」とそれに対するカント自身の考え方の全体、そして最終的なカントの「答え」を理解してもらうことを目的に据えている(5頁)。しかし取り上げられるテキストは『純粋理性批判』そのものではなく、『プロレゴメナ』である。それは『純粋理性批判』(1781年)の「問い」に対する誤解を解き、改めてその主旨を平易に伝える目的で執筆されたのが『プロレゴメナ』であり、カント哲学への入門書としても最適と筆者自身が考えているからである。ただし、本書の目的は『プロレゴメナ』の読解を通して、『純粋理性批判』とカント哲学の心髄の理解へと繋げることにあるので、重要な場面では『純粋理性批判』側で対応する箇所や同書固有の意義についても、論じ方の異同等も含めて度々言及されている(64-74頁参照)。

さて『プロレゴメナ』は、将来の教師となる生徒を想定し、彼らに既存の形而上学を学ばせるのではなく、新たに「形而上学がそもそも可能なのか」(25頁)を探究させるために書かれた本であることを確認した上で、筆者はこの「問い」にカントがどう答えているかを、『プロレゴメナ』そのものの論述に沿って追いかけ、具体例を盛り込みながらも、その主旨を正確に辿ろうとしている。全体は八章で構成されていて、各章が『プロレゴメナ』原典での区分を反映している。扱われている大まかな内容に沿って、本書の章【 】と対応する原典の区分( )とを記すと以下のようになる。

「問い」の端緒は既存の形而上学を脅かすヒュームの懐疑であり、新たな形而上学は、この懐疑に答え、既に成立している数学と自然科学を支えるア・プリオリな総合的認識の事実を通して「分析的方法」に従って求められる【一章】(序言)・【二章】(緒言、1～5節)。感性の形式としての時間・空間と純粋悟性概念とが別扱され、それらによって構成される可能な経験の条件が純粋自然科学の原則であることが明らかにされる【三章】(第1部6～13節)・【四章】(第2部前半14～26節)。この原則が現象としての「自然」を支え、構成していることの解明が、新たな形而上学への道を開くことになるが、ア・プリオリな総合的原則はあくまでも経験の可能性の原理であって、経験(現象界)を越えて物自体に適用することはできない【五章】(第2部後半27～39節)。しかし、絶対的全体として無制約的なものを求めてやまない理性は、悟性の判断を推論形式で組み合わせ

ることで絶対的全体へと至ろうとするところから「理念」が生み出される。だが理念は認識論的には仮象に過ぎず、そのことを理性が自己批判によって明らかにすることで、理念が有すべき意義と理性の限界とが明らかにされる【六章】(第3部40～59節)。そして【七章】(結論57～60節)では、理性の限界を確認した上で、理性の理念の実践的使用の可能性が説かれる。最後に、形而上学のためには「理性批判」が不可欠であることが確認され、『純粹理性批判』に向き合うべき姿勢が読者にむけて説かれている【八章】(付録)。

このように本書は原典の論述に忠実であろうとする解説書であるが、ここでは他の解説書とは異なる本書の特徴を(先ほど指摘した『純粹理性批判』との相関という特徴に加えて)幾つか指摘してみたい。

まず一つ目は、比較的コンパクトな解説書にしては、『プロレゴメナ』で言及されている人物の説明に加え、カントがこの本を執筆した当時とそれに先立つ思想状況が、書簡や書評、カント自身が講義で使用したテキストなどに触れつつ、(本文中で)紹介されているということである。それは筆者による、カント哲学への誤解も含めた当時の問題状況とカント自身の対応とを、丹念に描き出そうとする思いが反映した結果であると思われる。カント哲学の要点を、状況から引き離して一般的・没歴史的に解説するのではなく、あくまでも当時の思想・論争の文脈に即してカントの問題意識とカントの考え方を理解してもらおうとしている点が本書の一つ目の特徴である。

その一方で、カント特有の用語の意味や概念相互の関係を、時に図式的に(123頁や182頁)、混乱のないように整理して解説している点が二つ目の特徴としてあげられる。そもそもカントの「批判哲学」の「批判」が本来「分ける」という意味であり、まずもって「現象」と「物それ自体」を分けること意識した哲学であることが、初めに強調されている(6頁、他に83頁、164頁参照)。そして「形式と内容」「知と信仰」などの対比はもちろんのこと、「感性と悟性と理性」「直観と概念」「分析的と総合的」「論弁的と直覚的」「超越的と超越論的」「ヌーメノンとフェノメノン」「内容的自然と形式的自然」「仮象と理念」「制限と限界」等の意味と関係を丹念に整理・解説している点が本書のもう一つの特徴と言える。それはカントの批判哲学がいかに様々な概念をしっかりと「分けること」に意を用いているかを実地に示し、読者にもけって用語の常識的理解のまま漫然と読み進めないでほしい、という筆者の意向の表れでもあろう。

ところでそうした用語の区分の中で、「自然科学」の可能性を論ずる部分で導入される「知覚判断」と「経験判断」の区別は、『純粹理性批判』には見られない『プロレゴメナ』特有の区別として紹介されている。それは『純粹理性批判』の中でも難解とされる「純粹悟性概念の超越論的演繹」に代わるもののだが(119頁)、「知覚判断」と「経験判断」の区別から「純粹悟性概念」の必要性を論ずるにあたり、筆者は、自然科学の成立の事実を手がかりに、普遍妥当的で客観的な経験判断が下されている以上は、既に「純粹悟性概念をも手にして活用しているはずである」(127頁)と一旦は説明する。だがすぐさま読者が抱くであろう疑念を扶む。「このような主張を何か一方的な断定であると受け止める人もいるのではないだろうか。要するに、そこに話を落としたいんでしょ、と」(同上)。たしかにそこでは経験判断の必要条件が示されただけであって、十分条件まで提示されていない。読者としてはここで更なる解説を求めたいところだが、筆者はあくまでテキストの記述に即して、この仮定の疑問への答えを説明しきろうとする。読者が抱くであろう問いを挟みながらも、筆者はカントの思考の道筋から安易に離れようとはしない。そうした原典に対する忠実さが本書のもう一つの特徴であって、同様な姿勢は「自由」の問題を論ずる場面でも(219-

226頁)でも貫かれている。

あえて言えば、こうしたツッコミ以外にも、読み進める読者には様々な疑問が浮かんでくるだろうと想像できる。例えば『プロレゴメナ』の分析的方法に対して『純粹理性批判』の総合的方法の意義(優位性)はどこにあるのか(44頁、65-66頁参照)。現代の数学や自然科学の理解からすれば、カントの算術や幾何学の理解(56、80頁参照)、純粹自然科学の捉え方(114-115頁参照)は今日でも妥当性をもちうるのか、とか。そうした要望は、限られた紙数での解説を目指す本書には、無いものねだりの勝手な要求になってしまうことは分かる。ただ、説明が明晰であればあるほど、そうした問いや要望も読者の中には湧いてくるのではないだろうか。実は筆者自身も、その後の科学や哲学の展開を踏まえればそうした問いが湧いて来るであろうことを承知しながら論じているであろうことは、言葉の端々からうかがえる。たとえば、ア・プリオリな総合判断の可能性をめぐっては、クワインの「経験主義の二つのドグマ」に触れ(6頁)、概念が客観性を産出するとする「意識の哲学」を論ずるところでは、20世紀の言語論的転回との対照がなされている(137頁)。そしてそうした目配りは、カント哲学の今日的意義が、「分ける」ことを原義とする「批判」にこそ存することが強調されている所からもうかがえる(8頁参照)。

にもかかわらず、筆者にとりまづもって重要なのは、テキストに即してカントの言い分をしっかりと聞き取り理解することであり、ちょうど『純粹理性批判』への周囲の無理解がそうであったように、上辺だけの理解でカントを理解したつもりになってほしくはない。とはいえすべてを手取り足取り解説するわけでもなく、読者が自ら原典と格闘して疑問を抱えたならば、そこから先は「自ら考える勇氣」を持ってほしい、とも筆者は考えている。「ほんとうにそうなのかと疑い、自分でこの問題に決着をつけようとするなら、読者は、カントが…遂行した、ア・プリオリな認識の演繹(正当化)や、カントによってもたらされたア・プリオリな認識(すなわち超越論的認識)を吟味すべく、『純粹理性批判』を手にとらなければならなくなる」(227頁)、と。

その意味で本書は、『プロレゴメナ』の優れた解説書であると同時に、そこに説かれているカントの哲学への姿勢を学ぶことを通して、これから哲学しようと志す学徒に向けられた筆者自身の哲学の実践的教育書であるとも言えよう。